

新たな 連携へ

他制度産学官連携人材との協働

他制度人材との連携から企業に貢献

キーワード：他制度産学官連携人材・情報提供・開発効率

本事例の関係者

岩手大学
岩手県内機関
事業化プロモータ
製造業M社
T 研究員
K 担当顧問
文部科学省産学官連携
コーディネーター

人材活用で開発効率向上、強固な関係構築へ

【要約】

コーディネーターが製造業M社よりアクチュエーターの設計に関して相談を受け、学内の教員を探索した。適任教員が見当たらないため、県内機関の事業化プロモータに相談の後、M社関係者と面談を実施。情報交換を通じて、自社製品の開発効率アップに寄与させた。本件は、産学官関係者間ではネットワークの構築、企業にとってはニーズにマッチし開発効率向上というWinWinの関係が形成でき、現在、学内研究者を交えて交流を深め、自社製品開発に向けて活動を進めている。

【きっかけ】

コーディネーターがM社産学連携担当顧問K氏より自社製品に使用するアクチュエーターの設計に関して相談を受けたが、適任教員が存在しないため、他制度産学官連携人材の活用を視野に入れ、企業ニーズに応えようと行動した。

【段取り】

●関係者のメリットを考えた

コーディネーターが適任研究者を検討したが、アクチュエーター自体を研究している教員は本学にはおらず、企業ニーズに沿った代替案を検討した。他の産学官連携人材の協力を得ながら、関係者のメリットを考慮し、最終的に県内機関(他制度)の事業化プロモータとの面談をコーディネートした。

【ポイント】

●ニーズとシーズが合致し面談実施へ

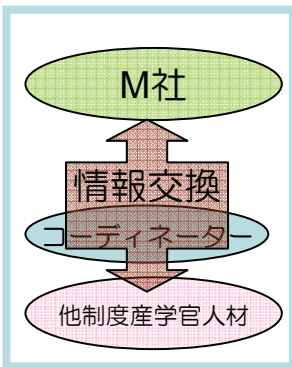
- ①事業化プロモータは、以前企業にてアクチュエーターの設計を担当した経験があり、本件には最適な人材とコーディネータが判断した。
- ②M社はこれまでアクチュエーターの設計は自社で行ってきたが、独自のノウハウの構築はされているものの、第三者による開発は受けたことはない。
- ③企業のニーズと事業化プロモータが持つシーズがマッチした。

【成果・結果や活動後の変化】

●有力情報を提供

2回の面談、数回に及ぶ技術論文等の文献情報の提供を通じて、M社T研究員はこれまで自分が行っていた手法が正しかったことの確証を得た。更に今後の開発を進める上での有力情報を得ることができたことを認識し、M社の開発効率向上に努めた。また、外部資金公募事業への申請についても事業化プロモータ、M社、コーディネーター間で検討・申請を行った。

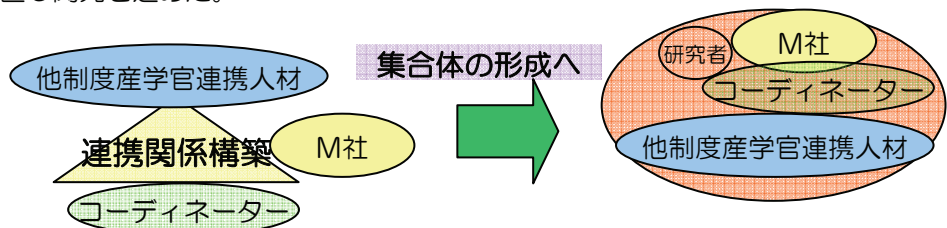
その後、学内にてアクチュエーターの研究を行っている教員がいることが判明し、当該教員と情報交換を行い教員の協力を得ながら、これまでの研究体制を見直し開発を進めた。



本事例の図式

開発効率寄与度

- 他制度産学連携官人材との2回の面談と数回の文献情報提供の実施
- 上記から開発工数30%の向上、開発過程で行う予定の1工程削減に成功



成功の事例

三位一体でWinWinを追求できた

●情報交換から外部資金応募へ

本事例は継続中の案件であるが、企業ニーズの課題解決、県内機関(他制度) 事業化プロモータ、コーディネーターとの連携構築というWinWinの関係が成立する。この関係を更に発展させるべく、学内教員の協力も要請した。学内教員の協力を得て外部資金獲得も視野に入れた対応を検討中であり、今後の発展が期待できる。

●多制度産学官連携人材に加えた学内研究者の協力も

M社T研究員は開発の中で、アクチュエーターのモールドに関して技術的課題を抱えていた。事業化プロモータとの面談により得た文献情報をヒントに前記技術的課題を克服した。また、開発過程で予定していた工程の削減にも成功し、現在実用化に向けて開発を推進している。

その後、学内教員がアクチュエーターの研究を検討していることが判明したため、当該教員ともコンタクトを取り情報交換を行ない、事業化プロモータと共に連携を行い、共同研究や外部資金獲得などの可能性も見えてきた。現在、別の外部資金獲得に向け、詳細を検討している。

新たなる 連携へ



製品イメージ

失敗の事例

視野を広げて臨むべきだった

●試行錯誤の繰り返し

事業化プロモータとの面談にたどり着くまでには幾つかのプロセスがあった。適任の教員が不在だったため、他の産学官連携人材に相談し、アクチュエーターを手掛けている幾つかの企業を選定し、接点を見つけて対応をはかろうとも考えた。また、異業種交流も実施したが、問題解決までには至らなかった。試行錯誤の中で、コーディネーターネットワークの活用も選択肢の一つとして考えたが、経済的、時間的要因から実現には至らなかった。

●適任者が身近にいた

本件がペンディングの中、県内機関の事業化プロモータに相談した。その結果、この事業化プロモータが最適任と判断し、M社へ情報提供して面談を実施した。その結果、M社のニーズに応えることができた。

適任者が思わぬところに存在したことは、問題解決に向けた選定に対して広い視野を持つべき教訓になった。

成功と失敗の 分かれ道

試行錯誤を繰り返しながら相談者を第一と考えて対応していることがポイント

産学官連携の新たな展開に向けた提言

情報提供から集合体の形成へ

●新たな産学官連携へ結びつける

ニーズとシーズのマッチングが定着してきている中、今日の産学官連携活動は次のステージへ移行する模索期間であるとの認識がある。県内でも産学官連携の有識者が集い、新たな産学官連携のモデルを形成すべく検討を行っている。コーディネーターも、こうした他制度産学官連携人材との係わりを大切にして活動のネットワークの拡大を図り、自己の新たな産学連携活動を展開する糧にしたいと考える。

●今後の展開に期待

本件は、大学の教員を交えて集合体を形成すべく、関係の輪が拡大しつつある状況である。よい関係を継続しながら、外部資金の獲得、企業製品の実用化など今後期待できる要素を高め、継続的な支援を行っていく。

☆コーディネーターの一言

他制度産学官人材との連携は、本件に限らず、戦略展開プログラムの産学官連携コーディネーター、特許流通アドバイザーとの連携も進めている